

瀬戸内国際芸術祭視察 小豆島島内 報告レポート

松本市議会会派「誠の会」 土屋 眞一

日時 令和7年10月19日日曜日

場所 小豆島島内各地

時間 午前10時00分～午後4時00分

参加者 3人 太田更三、土屋眞一、中山英子

成果及び所感

小豆島は、面積153平方キロ、人口26000人で瀬戸内海では淡路島に続く2番目に大きな島で、古くから海上交通の要衝として栄え、人や物の往来が盛んだったことで産業も発展した。

塩や醤油、そうめん、最近ではオリーブなどが有名になっている。

島内出身の壺井栄の「二十四の瞳」の撮影現場としても知られ、2011年には、角田光代原作の映画「八日目の蝉」では、中山千枚田や中山農村歌舞伎舞台などがロケ地となった。

瀬戸内国際芸術祭は3年に一度行われ、春会期は、4月18日から5月25日、夏会期は、8月1日から8月31日、秋会期は10月3日から11月9日という3期に分けて行われている。

今回、秋会期に訪れたが、高松港から土庄港を結ぶフェリーも大変混雑していた。土庄本町にある新作の長澤伸穂作の「うみのうつわ」は長蛇の列で見ることができなかった。

小豆島南部地域の野外作品を中心に8箇所ほど回ることができた。三都半島の神浦にある尾身大輔作の作品名「ヒトクサヤドカリ」の展示では、空き家を利用した作品展示であり驚きの芸術と言ってもいいと感じた。

近くの神浦コミュニティセンターでは、集落の人たちがボランティアでお茶とそうめンを振舞って頂いた。無料のアシスト付き自転車の無料レンタルもあり地域の人たちとの協力体制が長年にわたる開催でしっかり根付いていると感じた。

瀬戸内国際芸術祭は、3年に一度であり会期は3か月程度であるが、島以外からのインバウンドも含め島民の何倍もの人を集めているということは、私たちは初めて訪れるがリピーターも多いのではないかと感じた。実際にボランティアの方から同じ人が違う人を連れて訪れることもあると聞いた。

離島に限らず住民の高齢化、少子化の時代において、人が減れば土地は荒れ、コミュニティも失われて行くが、アートは地域の宝物になると思うし、設置されることにより、その地域に光があたりと思う。何より人と人との繋がりもできるのではないかと思った。

萩市まちじゅう博物館視察 報告レポート

松本市議会会派「誠の会」 土屋 眞一

日時 令和7年10月21日火曜日

場所 萩市役所

時間 午前9時00分～午前11時00分

講師 萩市まちじゅう博物館館長 大槻 洋二

出席者 3名 太田更三、土屋眞一、中山英子

成果及び所感

萩市は山口県の日本海側にあり、現在の人口は、40,700人。昭和30年の97,744人をピークに減少に転じ、平成29年には48,895人と半減し現在に至っている。

萩市は、江戸時代の地図がそのまま使えるまちであり、旧城下町の全体を古地図で歩くことができるのが大きな萩の特徴となっている。その随所で祭礼や産業、教育、生活文化などが息づいている。

萩市の歴史をまちづくりの条例等からみると、昭和35年萩市文化財保護条例（山口県初）、昭和47年萩市歴史的景観保護条例制定、昭和50年文化財保護法改正で伝統的建造物群保存地域制度発足、昭和51年萩市伝統的建造物群保存地区保存条例制定、平成2年萩市都市景観条例制定、平成15年萩まちじゅう博物館構想策定、平成16年萩まちじゅう博物館条例制定、平成17年景観法制定、平成19年萩市景観条例制定、萩市景観計画策定、萩市歴史風致維持向上計画を国が認定（10年計画）、平成30年萩市基本ビジョン策定（まち博構想が3つの柱）、平成31年第2期萩市歴史風致維持向上計画を国が認定、令和2年萩まちじゅう博物館構想の改定。いかにまち並み保存に力を入れてきたかが伺える。

失われていく風景や景観、担い手不足などの課題に対応していくのは、萩の特色であり、市内に広く存在する文化財や自然景観など「おたから」として保存・展示し、町全体が屋根の無い広い博物館と見なす「萩まちじゅう博物館」の取り組みを市民と行政の協業でおこない、現在も様々なアイデアを出し続けている。

萩に愛着と誇りを持ち迎える市民と、そこに惹きつけられる人々が行きかう、持続可能なまちづくり、観光づくりが「萩まちじゅう博物館」の目的となっている。

松本市のまるごと博物館との比較では、地域博物館・交流施設の整備が上げられる。伝統的建造物を活用し、メンバーによるおもてなし活動として「おもてなし茶屋」で観光客等をもてなしている。またイベント・展示会場としての活動もしている。

地域団体として「浜崎しっちゃん会」会員約80名、「佐々並どうしんてやろう会」約会員110名がある。

またNP0 萩まちじゅう博物館が平成16年6月設立され、会員は約200名。萩博物館の管理運営（受付、管内ガイド、レストラン、ミュージアムショップ）をおこなっている。学芸活動サポートとして、古写真のデータベース化、民具の手入れ、歴史

資料の掘り起しなどの活動もしている。

松本市においても、まるごと博物館友の会や市民学芸員などの人たちと萩市の団体のような地元密着のおもてなしの活動ができればいいと思う。

萩まちじゅう博覧会について触れておくと、このイベントは武家屋敷の内側に建つ珈琲店でプロのアドバイスを受けながら、自分だけのドリップバックコーヒーを作ったり、城下の豪商の名品を当代当主から特別に解説してもらったりといういわば体験型の催しである。2024年は、春期と秋期2回おこなわれ参加者2,200人を集めた。

大漁旗染め物体験、和菓子作りなど大変賑わったそうで一回で終わる計画が毎年の催しになった。

松本市の「まるごと博物館」構想は平成12年に策定され、萩市より3年ほど早かったが、萩で大きく花開いた形になり、訪れて初めて具体的な様子がわかった。

萩の歴代市長の行動力がこうした博物館と地元観光を結び付け、この地域の活力に繋がった事は事実である。

昨年松本市は、博物館の管轄が教育委員会から市長部局である文化観光部に移され、文化財保存と観光とが両輪となり、これからの文化観光の在り方が大きく変わった。

この視察を生かして松本市でも取り入れる所は取り入れ、本館博物館と15の分館の参考としたい。

政務活動費

使途項目 調査旅費 (日当 12,000、宿泊費 44,400 円、交通費 51,050 円) × 3 人
+ 土産代 2,377 円

—以上—